
歌う召喚術士

アニキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌う召喚術士

【Nコード】

N6195Z

【作者名】

アニキ

【あらすじ】

魔法と科学が当たり前にある時代

ふいに過去が「観え」てしまう少女メルは高校入学数日前から不思議な「過去夢」を観るようになる
見知らぬはずだが、どこか懐かしい感じのする少年が歌を歌っている夢

これが誰の「過去」かわからぬまま、メルは入学式を迎える
そしてメルは「彼」と出会う

プロローグ

声が聞こえる

それはきつとあの子の声
それはきつとみんなの声

みんな期待に胸を躍らせながら、笑顔であの子が始めるのを待っている

あの子はみんなに笑顔を振りまきながらゆっくり息を吸う

息を吸う音を聞き、みんな話すのをやめあの子に注目する

そしてあの子は静かに歌い始める

力強く、それでいて繊細な歌声

まだ変声期を迎えていないであろうその声は、時にはソプラノ歌手にも劣らない高音を紡ぐ

それを聞きながら私は、この時が永遠に続けばいいなと思った・・・

ケータイのアラームで目が覚めた私はさっきまで「観て」いた夢を思い出す。

どこか知らない森の開けた場所で少年と少年を囲むように座る人々
少年は笑いながら歌を歌い始める

周りの人たちも笑顔でそれを聞いている

これ自体はなんの問題もない光景だ。

夢なのだから突拍子のない状況でも領ける。

だが、そんな夢でも数日連続で見れば確実におかしいことに気付く。
これはただの夢ではなくきつと誰かの「過去」なんだろう。

私は生まれながらに「過去」を「観る」力がある。

別に変な話ではなくこの世界には魔法が実在する。

魔法は適性がある者なら努力次第で誰でも使えるようになる。

覚える早さや力に違いがあつたとしても確実に習得可能だ。そして
適性のある人の中には「潜在魔法」と呼ばれる先天的に魔法を身に
付けている人がいる。

私もその一人で、ふとしたきっかけで「過去」を「観て」しまうの
だ。

ここ数日「観る」夢もおそらく誰かの「過去」だと思う。

予知夢ならぬ「過去夢」

「過去夢」自体は別に不思議ではないが同じ夢を連続で観るのはこ
れが初めての事だ。

そして何より不思議なのは「過去夢」のはずなのにこの夢にはおかしい所があるということだ。

少年の歌はすぐく素敵だったがそこはへんじゃない。

森も場所はわからないが普通。

おかしいのは少年を囲んでいた人々だ。なぜならあの人たちには・

・

「メルー！！朝ご飯出来たわよー！！起きなさい！！」

夢の内容を思い返すのに時間をかけ過ぎたようでお母さんが一階から私を呼んでいる。

「今行くー！！」と私も言い返してリビングに行った。

今日の朝食はトーストとソーセージと目玉焼きと言うオーソドックスなものだが朝の定番とも言えるこれらを食べながら今日入学する学校のことを考えていた。私が通う私立サクラザ力魔法学院は私達の住む国ウインバードの中でも「ブルー」の称号を持つ魔法学校だ。この国には優秀な人材や功績を残した人物を多く送り出した機関にはクリスタルが贈られる。その中でもブルークリスタルは国の色である青を使っていることもあり、何よりも高い評価だと言える。

この学院は初等部からのエスカレーター方式でかつ、飛び級も出来るので実力のあるものはあつという間に卒業ができ、それが出来なくても試験をクリアすれば淡々とあがって行くのであるとは勝手に卒業になるのである。

小さな頃から魔法に慣れ親しめば自ずと魔法もうまくなり卒業時に

は即戦力になると言うわけだ。他の学校に飛び級はなくエスカレーター方式でもサクラザカ学院ほどうい人材を送り出せていないので客観的に見てもブルークリスタルを貰えるのは当然である。

そんな学校に私は受験し、見事合格（試験は魔法適性だけなので適性さえあれば誰でも入れる）し余裕ぶっていた私は学校の規則に「在学中に試験に落ちると即退学」と言う無慈悲な条件を見て泣きながら全く知識のない魔法学の予習をここ数日やり込んでいた。

「・・・もしかしてあんな変な夢観たのは勉強のしすぎだったんじゃない・・・」

「夢？」

「ううん、何でもないの。」

私はトーストの最後の一口を食べながらサクラザカ学院の制服に着替えお母さんに「行ってきまーす」と言って家を出て駅へ向かい歩き出した。

始まりの歌 1

サクラザカ学院は私の家の最寄りの駅から7駅先にある「サクラザカ学院前」と言う駅を降りて真っ直ぐ歩いた場所にある。

名前でわかる通り、この駅はこの学院のためだけに作られた駅だ。ブルークリスタルは伊達ではないところの1つだ。

駅を出て学園までの一本道を歩いていると私と同じ一年生であるう人達がちょいちょいいる。

サクラザカ学院高等部の制服は、黒と白を基調としたブレザーだ。一年生の場合、女子は青のリボン、男子は青のネクタイで二年生は黄色、三年生は緑色となっている。

ちなみにこの学院は魔法学校だが魔法科学の方にも手を出しており、学制服も魔法科学の力により夏は涼しく冬は暖かくなると言う超機能性制服なのだ。

魔法を学ぶ学校は基本、科学の力を忌避する所が多く、この学園はその例外の一つだ。

制服のデザインや機能性から学校を選ぶ女の子にはものすごい人気だが、魔法適性がなくては入りたくても入れないのに付け加え、試験に落ちると即退学と言う条件が敷居を高くしている。

もともと魔法学の予備知識がない人が入学しても授業について行けず、即退学になるのが関の山だ。

私もその類に漏れず、このままだとまずいので先ずは授業につい

て行けるようにしなくてはいけないと思いながら、私はサクラザカ学院の門をくぐった。

私は自分のクラスである1年A組に向かって歩いている。

旧来の学校だと掲示板に貼り付けられた自分の名前を探すため、大勢の中をかき分けなければならぬがこの学校は合格者に予め教育用小型端末を配布している。

この小型端末は教科書、各科目に必要な用語辞典、学院からの連絡など、学園生活に必要な物が全て詰まっており、より専門的なものを学習したいときは担当教諭の許可を得てプログラムをインストールすることが出来る。

今の状況ですでにいっぱいいいっぱいな私にはインストールするほどの余裕はないので、とりあえずこの機能は当面は使わないだろう。

お目当ての1-Aの教室を見つけ、窓際の最後列に座りHRが始まるのを待つ。

ただ待つのも暇なので周りを見てみる。

入り口側の最後列に座っている男子2人が楽しそうに話している。

一人は明るく勝ち気そうな顔をした黄緑色の短髪。もう一人は大人しく優しい感じのある黒髪外ハネショートウルフの男の子。2人とも身長は175cm位でどこにでもいそうな普通の男子だ。

この二人はかなり仲が良さそうなので多分同じ学校から編入したのか、エスカレーター組かのどちらだろう。

前の方では女子三人が何やら控え目に会話をしている。

左側は赤みがかったショートヘア、真ん中は栗色のセミロング、右側は黒髪のツインテールで本来首に巻く青いリボンで髪を止めて代わりに青いクリスタルのネックレスをしている。入学そうそうあんな着崩して大丈夫なのか心配になる。

3人はまだお互いの心の距離が取れてないようで自然に会話ができている。かなり初々しい。

女子三人組を初々しくていいなあと羨ましく思いながらも、私は誰かと話そうとはどうしても思えなかった。

今まで私は友達と言える人を作らなかった。

作れないではなく、作らない。

親しい人が出来たらきつと「観て」しまっから。

物思いに耽っていたせいか、そろそろHRが始まる時間になっていた。

チャイムが鳴ると同時にガラツと扉を開け「みなさん席について下さい。」とおっとりとしたしゃべり方の女の子が笑顔で教室

に入って来た。

目鼻立ちのよい綺麗な顔。

その笑顔は愛嬌があり女の私でも可愛いと思ってしまった。

髪型は金髪ポニーテール。身長は155cmくらいで小さい

だけどなんであの女の子、服の中にスイカを隠しているんだろう？不思議だな？何でかな？

・・・自分を誤魔化すのはやめよう。あの子はスイカ泥棒でも自分の体でスイカを栽培しているのでもない。

あれは本物だ！あれはガチの胸だ！！

こんなアンバランスな人間が存在したのか・・・

啞然としていた私は我に返り、周りを見るとだいたいの人はまだ我に返っていないようだった。

そんなチョベリバな女の子は（これを同じ女だと思いたくないので心の中で謎の物体Xと呼ぶことにした。）笑顔を振りまきつつ周りの人達を置き去りにしながら話し始めた。

「みなさん、入学おめでとうございます。私はこのクラスを担当することになりましたマリアンヌ・T・ウェールズです。一年間よろしく願います。」と言いながらウェールズ先生は綺麗なお辞儀をした。

すると、さっき見た二人組の男子の短髪の方がいきなり立ち上が

り手を挙げて「はい、先生！」と元気よく言った。

「はい、何でしょう？ マックス・スタンリー君」　と先生も真似しながら答える。あの短髪はマックスと言っらしい。

「マリアン又先生は先生ですよ？」

「そうですね、小さくても私は先生ですよ」

「じゃあ何で生徒の制服着てるんですか！」　と興奮気味で叫んだ。

確かにと大半の生徒が頷いている。

私も最初生徒だと思っていた。と言うか全員思っていたんじゃないのか？ 身長のせいかな、見た目同じ年くらいに見えるし。

そして私達の疑問に物体X先生（一応先生なので先生とつけとく。）は答えた。

「だって、可愛いじゃないですかこの制服」

確かに制服は可愛いし、物体X先生もかなり綺麗で可愛い。しかもゴビにハートが付きそうなくらい声を弾ましながら　嬉しそうに言う。

だけでも！　だけでもだよ！！

いい大人（今となつては年齢も疑わしい。）がそんな理由で生徒が着る制服を着て教壇に立ちますか！！と私は心の中で叫んでいた。

「それに、この制服は季節に応じて涼しくなったり温かくなるんで

いいんですよ〜」と取って付けたように言うX先生。

「いいんっすか、先生？先生がそんな感じで？」と訝しむマックス。

「いいんですよ〜この学校は服装に関して寛容なので〜実力のある人は多少服装を乱してもお咎め無し何ですよ〜逆にマックス君のようにまだ実績や実力を示せてない人がやったら先生方に目をつけられるんで気をつけて下さいね〜」

「・・・とりあえずいろいろわかりました。」テンションを露骨に落としながら席に座ったマックス。きつとマックスには「あんたのような雑魚が調子に乗ったらすぐに潰すわよ。」と聞こえたんだろう。少し同情。

「質問が終わったのでまずは今使ってる机に自分の端末を接続して履修したい科目を選んで下さい〜。」

私達は先生の指示に従い自分の端末を机に付いてるケーブルに差す。

机についているタッチパネル式の画面に「ようこそカグラザカ学園高等部へ」と言う文字と共にデフォルメされた女の子のキャラクターがメニユーの説明をしている。

このキャラクターの名前はルナリンという名前らしく、黒髪ロングヘアでこの学院の制服を着ている。昔あった極東の島国の女性の顔立ちに似ていてその国の美しい女性に使われる「ヤマトナデシコ」とはこんな感じの人に使われるのかな〜と思ってあれ、この顔どこかで・・・と思ったがその思考をとりあえずシャットアウトしてついでにルナリンの説明も無視して履修科目の選択を押す。(

何故かルナリンは悲しそうな顔をしていたような気がした。）

履修科目は一年生から三年生まで全部一緒である程度履修すると履修終了試験を受けれるようになり、合格するとその科目は履修を終えたことになる。そして、三年生までに30以上履修終了させれば卒業資格を貰える。

だが、中間、期末試験を合格しなければ即退学になるので日々の学習が重要になっている。

逆に実技の試験は緩めで落ちても再試験を受けて一定の値を出せば合格になる。魔法は努力で習得可能だが習得には個人差があり、体調や精神状態に影響を受けやすいことを鑑みたことによるらしい（らしいと言うのは、これはルナリンが勝手に説明をしていたのを聞いていたからだ。）

とりあえず、私は基礎、あるいは初級と書いてある科目を一通り選択した。

潜在魔法を持っていると言っても勝手に起動する魔法なので魔法を使っている気になれない私にはまず基礎的な魔法を覚えてどんな感じが掴みたいからだ。

後からでも追加で履修科目は入れるのでとりあえずはこんな感じでいく。

選択を終えて少しして、先生が「そろそろ入学式が始まりますのでみなさん、続きは入学式が終わってからにしてください」とゆるゆるい感じで言って全員を廊下に並ばせ、入学式が行われる講堂に引率し始めた。

始まりの歌 2

たいていどの入学式もお偉い人の眠りを誘う長い話があり、私もだいぶウトウトしている。(たぶんあの話しは人を眠らせる魔法の詠唱と同じ効果があると私は睨んでいる。)早く終わることを願っていたら、どうやら叶ったようで「これからの日々を充実したものに・・・」とか言って終わった。

お偉いさんの次は生徒会長の挨拶になった。

・・・何かあまりにも型にハマった生徒会長の挨拶はお偉いさん方の話しと対して変わらなかったので聞き流した。

だけど、新生代表の挨拶は少し違った。

「新生代表挨拶。新生代表レイ・F・ゴッドランス」

「はい」

司会の先生の言葉に立ち上がり静かに応えた男子は壇上に上がって挨拶を始めた。

腰まである長い黒髪。

一目見たらどんな女の子も惚れてしまうのではと思うほどの美麗な顔。

かなりの高身長で180cm以上あると思う。

だけど私が一番気になったのはその目だった。

誰も寄せつけない冷たい瞳。その瞳が何故か気になった。

「新入生を代表して入学の挨拶をさせて頂きます。

私がこの学園に入学した理由は今まで魔法の習得に力を入れていて知識の方が疎かになっていたのでそれを補おうと思ったからです。私以外の新入生も何らかの理由、もしくは目的を持ってこの学園に入学したと思います。

私達は自分の目指すものの為に全力でこの学園生活を過ごそうと思っています。以上です。」

拍手が鳴り響く中、彼は一礼するとそのまま降壇して自分の席に戻っていった。

多分この挨拶を額面通りに受け取った人は多分いないと思う。なぜなら新入生代表の挨拶は基本的にエスカレーター組の中で実技、学力の総合トップがやることになっているらしく（科目を決め終わった後ルナリンがまたもや勝手に説明してた。）編入組が新入生代表をやるのは異例だ。

それを踏まえれば実技だけでなく学力もエスカレーター組の総合トップよりも上ということになる。

流石の私もこの超人の話しには睡魔も来なかった。

新入生代表ことレイ・F・ゴッドランスはこの国の中でもトップクラスの名家ゴッドランス家の長男である。それだけでもかなり話題性が高いが、彼を世界中でその名を知らしめているのは、国際魔法大会、通称 Road of GARIUS 略して ROG と呼ばれる大会の三年連続優勝者だから。

国際魔法大会は文字通り世界で一番強い魔法使いを決める大会だ。出場者は毎年10万人を越し、視聴率は70%を越し（以前番組のアンケート結果でテレビ中継を生で最後まで見た人が70%で残りの人は仕事があつて見る事が出来ず、これから録画したのを見ると言う人らしく国際魔法大会を見た人はほぼ100%なのではと言われている。）しかも国によっては大会中の7日間ほとんどの人が仕事を休んで大会を見に行ったり、家に籠もってテレビ中継を見たりするので経済活動の停滞を懸念する声が挙がるほどだ。）

この大会は国の代表を決めて争うものとは違い、13歳以上の魔法使いなら誰でも参加が可能だ。子供は大人に勝てないと言う常識は魔法の前では通用せず、その為13歳という子供でも参加ができるのだ。

だが今までの優勝者は大抵大人だった。それは本戦までの試合は競技性、ゲーム性の高いものとなっているのに対し、本戦は1対1のトーナメント方式で魔法で相手を倒す、または制限時間終了時点で得点の多かった方の勝ちになる。

これだけでは子供が勝てない理由にはならない。

だが、本戦の恐ろしいところは試合が始まるとタイマンの殺し合いになってしまうのだ。

殺し合いと言っても本当に死者が出たことは今まで一度もない。なぜなら、審判員と一緒に「時間逆行」を使える魔術師が予め魔法を待機状態にして見ているからだ。

「時間逆行」は文字通り魔法をかける対象の時間を戻すかなり高度な魔法だ。高度な魔法故に戻せる時間も五秒から七秒程度なのに

魔法力をかなり使ってしまう。だが、一度使えばたとえ首を切られようと時間内なら切られる前の状態に戻せるのだ。

そして相手に致命傷を与えた方がポイントが高く、致命傷を受けた方は怪我は無くても心に多大なダメージを受けるので戦うことに慣れてない子供達はそのショックとポイント差で「まいった!!」となるのだ。

そんな中、13歳という年齢で優勝しただけでなく今もチャンピオンの座についている彼は世界中で一番強い魔法使いとして羨望の眼差しを受けている。

終わりの歌 3

入学式が終了しX先生の引率で教室に戻った。

「それじゃあ全員、科目が決まったようなので自己紹介をしましょう。それじゃあ廊下側の一番前の人からお願いします。」

X先生の言葉に一番前の生徒は自己紹介を始めた。4人目が終わって次はあのマックスって男子の番になり立ち上がろうと腰を浮かせようとしたとき

「あっマックス君はさっき先生が名前言っちゃったからしないでいいですよ。」と言われズッコケた。

「何ですか!!俺にも自己紹介させて下さいよ!!」

「冗談ですよ。マックス君は元気いっぱいですね。ちなみに私の持つてる資料だとマックス君の趣味は。」

「先生!!俺の紹介しないでくださいよ!!」

「わかりました。じゃあ次の人どうぞ。」

「自己紹介しないって意味じゃないですよ!あっどうすりゃいいんだ!」とX先生の生徒いじりで教室は爆笑の渦に巻き込まれた。ぶっちゃけ今でいいじゃないかなやつなのかわかったので十分自己紹介になったと思う。

そんなこんなで彼の自己紹介は終わり黒髪の男子の番になった。

「キサラギ・ゴウです。よろしく願います。」

彼は気弱そうな喋り方で簡素に自己紹介を終わらせた。

次々自己紹介する中、一番最後の私の番になった。

・・・とうとうこの時間が来てしまった。

私は自己紹介が苦手だ。これと言った趣味や特技を持っていないので趣味を言わなくてはいけないときはたいていそこまで好きじゃない「読書」を無難に言うしかないし、何より一番嫌なのは・・・

「メルル・オーガストです。よろしくお願いします。」

名前を言った途端に周りの人のざわつく声が聞こえる。

「メルル・オーガストってあれと一緒にだよな？」

「ああ、勇者レオンに出てきたヒロインと一緒にだよ。」

「すげー！同姓同名かよー!!」

そう、私の名前を言うことだ。

私の名前は「勇者レオン」と言うアニメに出てきたヒロインと同姓同名だ。

勇者レオンは私達が5歳頃に日曜日の子供向け番組として始まったアニメだ。勇者レオンはブルーバードの神話に出てくる誰でも知っている英雄だ。神話を元にしたアニメは珍しくないのだが、子供

向け番組としてはかなり重厚なストーリー、登場人物達のアツいセリフ、耳に残る音楽など子供だけじゃなく大人も惹きつけるほどの作品で勇者レオンが終わった後もシリーズ化し、ブルーバード以外の国の神話に出てくる勇者なども題材に今も続いている超大作アニメだ。

そんなわけで昔から私の名前は周りの人からかなり好奇心で見られてはしまうのだ。

「全員の自己紹介が終わりましたので、これでHMは終わりです。これで今日は終わりです。下校してもいいです。部活や各教室の場所が気になる人は端末から情報を見れるので好きに見学してきて下さい。」そう言つてX先生は教室を後にした。

私は特に部活も入る気がしないし各教室も端末から地図を出せばいいので帰ろうと立ち上がろうとしたら声をかけられたら。

「あなた、随分変わった名前ね。アニメのヒロインと同じ名前なんてあなたの親はふざけて名前をつけたのかしら？」

いきなりなセリフを浴びせてきたのは今朝、前の席で話をしていた黒髪ツインテールの女子だった。

「あのアニメが始まった後なら狙ってつけたんでしょうけど私の方が先だからきつと向こうの方が狙ってきたのね。」と軽く受け答えする。悪意があるのが丸わかりだけど、この程度なら何度もやっている会話だ。いくらでも返しのストックはある。

それにしてもこの子どこかで見たような、と思って机の画面を見るとルナリンが背中を向けていじけていた。

・・・もしかして？

「ルナリン？」とツインテールの子に話しかけると引きつった顔をしてこっちを見た。

「ど、どうしてわかったのかしら？」

「髪型が違っただけでそのまんまあなたのデフォルメじゃない。というかなんであなたのデフォルメキャラが学園のマスコットキャラみたいになってるの？」

「あつ、あなた、私の自己紹介聞いていなかったんですか！？」

「聞いてたんだけどルナリンのインパクトに全部吹っ飛んじゃった。」

「私はカグラザカ・ルナ。この学園の創始者のカグラザカ・ゲツエィの娘ですわ。私の自己紹介を忘れるなんてありえないですわ。」

「あーごめん、ごめんちゃんと聞いてなくて、ルナリンの好きな物が琴とお刺身で5月にあるR O Gに出場してレイ・F・ゴッドランズに勝たないとハラキリゲイシャになっちゃうこと聞いてなくてごめんね。」

「ルナリンって言わないで下さい！！それに自己紹介ちゃんと覚えてると思ったらなんか違う言葉が混ざってますし！！何ですかハラキリゲイシャって！？」

「いやーカグラザカって名前ニホン国の名前だったと思ったからそ

んな感じだったかなあて。」

「よく知らないのに適当なこと言わないでよ！」

「じゃああなたも同じね。よく知りもしないのに私の親のことを適当に言わないで。」

「ぐっ……」

「言いたいことが終わったなら私は帰るわね。」

私は立ち上がって扉に向かって歩いて行った。いつの間にかクラス中の注目を集めてみたいでみんなこっちを見ていたが、気にしないで扉を開けて廊下に出た。

玄関で靴を履き替えて外に出ようとしていきなり声をかけられた。

「君、さっきは凄かったね。あのカグラザカのお嬢様をバツサリと言い負かしたんだから。」

私に声をかけてきたのはマックスって男子だった。その隣にはキサラギって男子もいた。

「ルナリンがいきなりいちやもんつけてきたんだからしょうがないじゃない。」

「……あのカグラザカにルナリンって言うのは禁句だから気をつけときな。目をつけられるから。」

「目を付けられたからって何かあるの？」

「カグラザカは本当なら入学生代表をする位の實力なんだよ。しかも創始者の娘だから周りのやつもアイツに媚びを売ってるからそういう奴らがお前に嫌がらせとかしてきてもおかしくない。」

「だから？」

「いや、普通はヤバいと思うだろ！周りの奴らがお前の敵になるかもしれないだろ！」

「別に気にしないわ。嫌がらせを受けて1人になった方が気が楽だから。」そう言っただけを出ようとした。

「メルルさんは1人ぼっちになってしまってもいいの？」とキサラギって男子が聞いてきた。そのまま行ってしまうかと考えたけど何故だか振り返って応えてしまった。

「構わない。・・・それにその方が辛くない。」 最後の方は声が小さくなってしまったがこれで終わりにしよう。

「それと言いついてたわ、忠告してくれてありがとう。それじゃあ私は帰るわね。」

そう言っただけは玄関を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6195z/>

歌う召喚術士

2012年1月4日04時48分発行